修士論文(要旨)
2009 年 1 月

タイ王国・後期中等教育における日本語定着状況と課題
―バンコクＳ校の調査から―

指導　佐々木倫子　教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4017
見崎紹代

目　次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第１章　研究の背景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
1.1　研究の動機・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
1.2　先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
1.3　タイにおける日本語学習者数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
1.4　日本人社会の変遷と日本語教育　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
1.5　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第2章　タイ王国における後期中等教育と日本語教育・・・・・・・・・・・・・・ 9
2.1　外国語政策・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2.2　後期中等教育の日本語教育カリキュラムとシラバス・・・・・・・・・・・10
2.3　第二外国語としての日本語教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
2.4　日本語教育推進への対応・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

第３章　S 校の概要と日本語教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
3.1　S 校の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
3.2　日本語教育の導入過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
3.3　具体的な指導形態・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
3.4　生徒の学習態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

第4章　S 校における実態調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
4.1　調査の目的と調査対象者及び調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・21
4.2　実態調査Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
4.3　実態調査Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
4.4　調査内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

第５章　実態調査Ⅰにおける結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
5.1　調査ⅠA の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
5.2　調査ⅠA における結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
5.3　調査ⅠB の結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
5.4　調査結果のまとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

第６章　実態調査Ⅱにおける結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
6.1　調査ⅡA の結果の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
6.2　調査ⅡA の結果の学級間比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
6.3　調査ⅡB の結果と分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
6.4　インタビューの結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

第７章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
7.1　日本語の定着と自己評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
7.2　自律性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
7.3　自己調整学習能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
7.4　日本語・日本への関心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

第８章　課題と提言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
8.1　日本語定着の低さ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
8.2　動機継続のための支援・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
8.3　結束的学習集団・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
8.4　コミュニケーションと日本事情・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・71

おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

参考文献

資料

謝辞

研究の要旨

タイ･バンコクの高等学校で、日本語の授業から背を向け、集中できない生徒の指導に苦慮した経験がある。この経験から、後期中等教育における日本語教育の実態をより深く捉えることにより、原因と解決策が明らかになるのではないかと考えた。そこで、S 校で実態調査を実施した。実態調査は、集団調査を 2 回、インタビュー調査を加えた計 3 回である。1 回目の実態調査Ⅰは日本語を履修している生徒 212 人、2 回目の実態調査Ⅱは、4 年生(日本の高校 1 年に相当)のみを対象とした 70 人である。3 回目のインタビュー調査は、2 回目の調査対象者から 23 人を抽出して実施した。

(1)調査ⅠA(日本語の基礎テスト：稿者作成調査票 A)
ごく基礎的な文字の産出テストである。簡単な文字においても、定着状況の低さは全学年に見られる。学年間におけるテストの成績の差は見られない。日本語の学習期間が長い 6 年生（高校 3 年生）においてもひらがなの五十音を習得していない生徒が多く存在し、授業内容を理解できない状況が作り出されている。日本語の入門期においてすでに文字の定着の低さが改善されぬまま、積み残し状態で、日本語学習を継続している。2 年、3 年と学習を継続しても依然として入門期の内容に留まっている。日本語の定着の低さは、以外にも学習を始めた直後に既に始まっている。

(2) 調査ⅠB(アンケート調査：稿者作成調査票 B)
20 項目から成る日本語に対する意識を調査するアンケートである。学年が進むにつれ、または、学習期間が長くなるほど、日本語に対する興味や関心、さらには日本事情に対する意識後退を示す回答が多く見られた。「学習された無力感」（ドルニェイ：2005）を感じている生徒の存在が目立ち、学習の動機の継続の難しさが回答から明らかになった。

(3) 調査ⅡA(日本語の基礎テスト：稿者作成調査票 A)
4 年生を対象として､5 ヵ月後に同じテストを実施し､定着の状況変化を見たものである。全体的にはやや上昇が見られた。日々の日本語の授業を通して文字が定着し改善されてきている。また、1 回目の調査で 70 点以上の生徒は、2 回目でも点数が降下することなく上昇を見せている生徒が多い。

(4) 調査ⅡB(アンケート調査：稿者作成調査票 B)
4 年のこの時期では、全体的には興味・関心・意識の後退は見られず、向上している項目が多く見られる。文字の定着が低い生徒が見られるものの、日本語を学習することに対して期待感や夢をもっている生徒が多い。日本語を学び始めて 1 年目のこの時期は、たとえ定着状況が悪くても、指導方法によっては再びやる気を取り戻すことができるターニングポイントに当たる重要な時期といえる。

今後の課題
日本語の定着の低さは、日本語学習がスタートした直後に既に始まっている。このことは、丁寧で確実な文字指導が入門期では特に必要であることを示している。その後の生徒の学習意欲や動機を継続させる力になるからである。生徒が、日本語に対して学習効力感をもてないことは、学習の意欲や動機の減退に繋がる。ひいては、日本や日本文化に対しても興味や関心を低下させる大きな原因となる。
こうした実態を解決するために、日本語の入門期における指導の重要性を確認し、具体的に方策を開発していくことが、現在、後期中等教育の現場おいてとくに求められている

〈参考文献〉

有泉芳彦(2000)「学習者にやさしい日本語教育:Andragogy の視点から」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第 10 号　国際交流基金
生田守・北村武士(2006)「単一国研修における海外センターとの国内の連携」－タイ中等学校日本語教師研修の場合－」『国際交流基金　日本語教育紀要』第 2 号
ウォラウット　チラソンバット・北村武士　(1996)「タイのける日本の教育」『世界の日本語教育』第 4 号　国際交流基金　日本語国際センター
ウォラウット　チラソンバット (2001)「タイの言語政策-日本語教育の場合-」『日本語教育事情報告編　世界の日本語教育』第 6 号　国際交流基金　日本語国際センター
岡崎　眸･岡崎敏雄(2005)『日本語教育における学習の分析とデザイン　言語学習過程の視点から見た日本語教育』凡人社
岡本洋三・西口光一・山田　泉 (2003)『人間主義の日本語教育』凡人社
来島洋美・鈴木庸子 (2003)「独習による日本語学習の支援―その方策と ARCS 動機づけモデルによる評価―」外国語学習における独習型読書システムの開発と利用に関する基礎的研究の研究成果から
国際交流基金(2003)『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査･2003＝』
国際交流基金(2004)『日本語　あきこと友だち』１. BOOKS Kinokuniya　Thailannd
国際交流基金(2006)『海外の日本語教育の現状＝日本語教育機関調査･2006＝』
佐久間勝彦(2006)「日本語教育の広がり〉『日本語教育の新たな文脈』国立国語研究上編アルク
嶋津　拓(2008)『海外の「日本語学習熱」』
ジマーマン.J.バリー･ディル･H･シャンク (2006)『自己調整学習の理論』北大路書房
チェンスッチャリットタムチ.プタニー (2004)『日本語教育事情報告編　世界の日本語教育』第 7 号　国際交流基金　日本語国際センター
ドルニェイ.ゾルタン (2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店
瀬戸正夫 (1995)『父と日本に捨てられて』　バンコク交流基金文化センター図書館所蔵
西口光一(2005)『文化と歴史の中の学習と学習者　日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社
ネウストプニー.J.V.･宮崎里司(2002)『言語研究の方法　言語学･日本語学・日本語教育に携わる人のために』くろしお出版
野畑理佳・ウィパーガムチャンタコーン (2006)「タイにおける中等学校教員養成の概要と追跡調査報告－タイ後期中等教育における日本語クラスの現状－」『日本語教育事情報告編　世界の日本語教育』第 16 号　国際交流基金　日本語国際センター
八田直美(2008)「国際交流基金バンコク日本文化センターによるタイ人日本語教師のための〈水曜研修〉－ノンネイティブ教師研修における学び合いと研修成果の教育現場での実践―」『日本語教育紀要』第 4 号　国際交流基金
古川和人・湯山佳代 (1999)「後期中等日本語教育の量的拡大傾向に関する事例研究―『世界の日本語教育』第 6 号　国際交流基金　日本語国際センター
本名信行・岡本佐智子(2000)『アジアにおける日本語教育』三修社
松井嘉和・阿部洋子(1991)東南アジアにおける日本語教育概観」『講座日本語と日本語教育日本語教育の現状と課題』　第 16 巻上野田鶴子編　明治書院
山田　均 (2006)『タイ語の耳聴いて話して楽しい入門』　白水社